
シークレットゲーム ~ subversive elements ~

プクプク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム ～ subversive elements ～

【Nコード】

N9208X

【作者名】

プクプク

【あらすじ】

出口の封鎖された建物へと連れてこられた13人のプレイヤー。彼らが参加させられるのは、己の生死を懸けたゲーム。ルールを守り、限られた時間内に首輪の解除条件を満たさなければ、首輪の作動によって殺される。生き残るためには、PDAに書かれた常識では考えられないことを成し遂げなければならない。命懸けのゲームが今、その血に塗れた幕を開けた・・・

第1話 少年と少女（前書き）

この小説はシークレットゲーム（キラークイーン）の二次創作小説であり、『シークレットゲーム（KILL or DIE）』をエピソード1としたときのエピソード2にあたります。

登場人物はエピソード1と変わりませんが、細かい設定は変わったりしています。

互いが互いのネタバレを含んでおりますので、どちらから読んでもらっても、片方しか読まなくても大丈夫．．．なように書きたいと思います。

もちろん私個人としては両方読んでもらいたいですが。

原作とは一部のルールや首輪の解除条件が違いますので、ご了承ください。

ご都合主義や主人公補正があったりしますが、そちらも黙認していただければと思います。

以上のことが大丈夫だという方は、どうぞこのまま本文へお進みください。楽しんでいただければ幸いです。

第1話 少年と少女

『それではみなさん、よいお年を〜!』

年末恒例の紅組と白組に分かれて競い合う歌番組が終わりを告げる。

「いよいよ今年も終わりねえ」

母さんがしみじみと呟く。

「そうだな、今年もいろいろあったが、明日からは新年だ。3人も、気持ちを一新して新年を迎えよう」

父さんがオレと兄貴の肩を軽く叩きながらそう言う。

「そつだぜ兄貴、いつまでも修学旅行の時のことを引きずってんなよ」

本来修学旅行に行っていたはずの間、兄貴はどこか知らない建物に幽閉されて、殺し合いみたいなのがゲームに参加させられたらしい。そんなことがあり得るのかと思ったが、兄貴がそこで撮ってきた写真から、オレはそれを信じざるを得なかった。

「・・・そつだね」

「ん？ 彰あきひ、修学旅行で何かやらかしたのか？」

「いや、そうじゃないよ、父さん。ただもうちょっと楽しみたかったなっただけ」

オレはそのことを警察や両親に相談しようと言ったが、兄貴は両親に心配を掛けたくはないからと言って、そのことをオレ以外には言わなかった。オレには心配させてもいいのかよ、とか思ったが、兄貴曰く、オレにも気を付けておいてほしいから、だそうだ。

ちなみに、オレたちは本当の両親とは既に死に別れている。その後しばらく孤児院で暮らしていたが、4年前に今の両親に引き取られた。

「はははっ。そうか、まだまだ遊び足りなかったか」

「でも、受験が終わってからね。そうしたら、またみんなで出かけましょう」

「そうそう。受験が終わったら、パーツとお祝いをやってやるんじゃないか。彰の合格祝いと、2人の学校卒業記念にな！」

「いや、父さん、まだ僕は合格したわけじゃないから」

「大丈夫さ、彰ならな。これが斎いっきなら心配だが」

「あ！ 父さん、俺を馬鹿にすんじゃないやねぞ！ これでもテストで100点取ったことがあるんだからな！」

「おお、そうか！ 斎もやればできる子だったんだな。いつも外で駆け回っているイメージがあるから、ついつい遊んでばかりなのかと思ったぞ」

「そんなわけないだろ！ オレは文武両道なんだ！」

「そうか、なら、うちの子は二人とも優秀だな」

「あつたり前だ！」

「まあまあ、2人ともじゃれあうのはそれくらいにして、もう年が明けるわよ」

時刻は既に23時59分を過ぎていた。

「そうだな、初水を汲む準備をしなければ」

父さんはそう言っていそいそとシンクへ向かう。オレは兄貴と母さんと一緒に、テレビの前で年が明けるのを待った。

そして、時計の針が深夜の零時を指すと同時に、テレビから明けましておめでとつうの音が聞こえる。

「彰、斎、明けましておめでとつ」

「うん、母さん、明けましておめでとつ」

「明けましておめでとつ！」

その後は家の近くの神社に初詣に行って、深夜2時ごろに寝て、朝起きておせち料理を食べ、一日中テレビの前でだらだらと過ごした。次の日も同じように、朝には昨日のおせちの残りを食べ、兄貴は勉強するために部屋に戻ったが、オレは再びテレビを占領して一日を

終えた。

だが、幸せな日々はそこまでだった。その日の深夜、家が火事になった。決してオレや兄貴、ましてや、父さんや母さんのせいではない。誰かに放火されたのだ。それも、わざわざ両親の寝室の真横に。

結果、両親はオレと兄貴の目の前で命を落とし、オレたちだけが生き残った。

また、オレたちだけが生き残ってしまった。

．．．

オレの夢はそこで終わった。理由は簡単、オレが目覚めたからだ。

「ん．．．、ふあ．．．」

体をほぐすために、軽く伸びをする。

たまに、こんな風に昔のことを夢に見ることがある。その度に、オレはそこからのことも思い出す。

その後、どこかから現れた身元引受人に、兄貴は進学を諦めさせられ、就職することになった。当時、その人の目を盗んで、兄貴はオ

レにその人が以前の組織の関係者だということ伝えた。きつと、放火も組織の仕業だったのだろう。だが、身元引受人を組織側に押さえられた以上、オレたちができることは何もなかった。

オレは一人暮らしをすることになり、兄貴は組織で働く、つまり、ゲームに組織側の人間として参加させられることとなった。

オレの地獄の日々はそこから始まった。

不定期に、オレのもとに兄貴が人を殺すところを撮った写真が送られてくるのだ。オレは躍起になって組織の尻尾を掴もうと足掻いたが、ただの無駄骨だった。しばらくしてその写真も送られてこなくなり、オレは進学を許されていたため、志望校を目指して勉強した。

そして、オレは志望校に見事合格することができ、今ここにいます。

「……って、ここは……?」

てっきりいつもの如く、授業中に居眠りでもしていたのかと思っただが、そうではなかった。

かといって、家にいるわけでもない。

ここは、以前に見せてもらった兄貴が撮ってきたゲームが行われた場所に酷似していた。

全面がコンクリートの壁に、同じくコンクリートできていて敷物の一切ない床。埃っぽいわけではないが、薄汚いベッド。

それに……

「・・・やっぱりか」

首には首輪が、机の上にはPDAが、それぞれ兄貴の写真通りあった。

とりあえず、オレは唯一の手がかりであるPDAを手に取ってみる。画面には、クラブの4が大きく表示されていた。その下にボタンがあったので、それを押してみると、画面が切り替わり、『ルール』、『機能』、『解除条件』という文字が表示された。

「・・・上から順に見ていくか」

まずはルールの文字に触れる。すると、画面に合わせて4つのルールが表示された。

<ルール1>

参加者には特別な首輪が付けられている。

それぞれのPDAに書かれた条件を満たした状態で、首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外すことができる。

条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、警備システムと連携して着用者を攻撃する。

<ルール2>

参加者には1～9のルールが4つずつ教えられる。

与えられる情報はルール1と2と、残りの3～9から2つずつ。およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

<ルール5>

侵入禁止エリアが存在する。

初期では屋外のみ。

侵入禁止エリアへ侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。

また、2日目になると侵入禁止エリアが1階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

<ルール7>

開始から6時間以内に人に危害を加えると、危害を加えた者の首輪が作動する。

過失や正当防衛は除外。

まず1つ目には主に首輪の外し方が、2つ目にはルールが全部で9つあることが、3つ目には進入禁止エリアがあり、そこに一定時間以上いると首輪が発動することが、4つ目には開始から6時間以内

は人に危害を加えてはいけないということが書かれていた。

次に、1つ前の画面に戻って、今度は機能の文字に触れる。その中からさらに文字が浮かび上がったが、現在そこにあっただのは『地図』という文字だけだった。それをタッチすると、異常に広い地図が展開された。画面に入りきらず、手で動かしてようやく全体を見ることがができる。

・・・と思ったら、拡大、縮小機能がついていたので、オレは画面に地図が入りきる大きさに設定した。

今は必要なかったので、再び前の画面に戻り、最後に解除条件の文字に触れる。

「解除条件・・・、4名以上の殺害？」

そこに書かれていたのは、常識では考えられないことだった。だが、既に兄貴のことで多少ながら事情を知っていたオレは、こんな条件があってもおかしくはないと思った。

追記で手段は問わないと書かれているが、これはどういうことだろうか？

よくわからなかったので、とりあえず放置しておくことにする。

「さて・・・」

これからどうするか、そんなことは決まっている。

「ようやくオレの番か。何としてでもここから生きて帰って、お前

「たちの悪事のすべてを暴いてやる・・・！」

オレはその思いを胸に、まずはルールを全て確認するため、他の参加者との遭遇を目的に建物の中を歩き始めた。

「誰もいないな・・・」

さすがに広すぎるのか、もうかれこれ30分は歩いているが、オレは未だに誰とも会えていなかった。

「先に上に向かうか？・・・いや、やめておいた方がいいな」

おそらく今2階以上に行くと、他のプレイヤーと接触する確率はかなり低くなる。できれば開始から6時間以内にすべてのルールを把握しておきたいので、オレはこのまま歩き続けることにした。

その後も歩き続けていると、オレはホールのようなところに出た。

「随分と大きなホールだな。元々は何かの会場だったのか？」

外に出ればここがどんなところか少しはわかるかもしれないと思っただが、残念ながら入口にはシャッターが下りていた。

「ん、あそこだけ壊れているな・・・だが、その先はコンクリートで埋められているか」

一か所だけシャッターが壊れている場所があったので、そこへ行ってみたが、その向こう側に見えていたのは他と変わらないコンクリートの壁だった。

「まあそうだろうな。ここから逃げることができるのなら、殺し合いになどならないしな」

オレはそこから立ち去ろうとして、そこで声を掛けられた。

「ねえ」

「っ!」

突然の出来事に動揺し、オレは勢いよく振り向いた。

「きゃあ!」

オレが急に後ろを振り向いたからか、いつの間にかオレの後ろまで来ていた少女が驚いて尻餅をついた。

「・・・いくら戦闘禁止期間中だとは言っても、もう少し用心した方がいいな。」

気の抜きすぎているとルールを知らない奴にいきなり殺されかねない。

「悪い、大丈夫か？」

オレはそう言って、倒れた少女に向かって手を差し出した。

そのついでに、オレは相手を軽く観察してみる。身長はそれほど高
くなく、とくに運動をしているような体つきには見えない。俺と同
い年くらいで、髪はダークブラウンのセミショートだ。

・・・武器さえ持っていなければ、こいつにやられることはまずな
いな。

「あ、ありがとう」

少女はその手をすんなりと握って立ち上がる。

「急に後ろ振り向くからびっくりしちゃった」

「悪かった、次があれば気を付ける」

「ふふっ、そうね、そうして」

少女は立ち上がった後、軽く服をはたいて、自己紹介をした。

「私は千島泉希ちしまみずきっていうのよろしくね」

「ああ、よろしく。オレは村崎齋むらさき さいだ」

「ふーん、村崎君って言うんだ。それで、こんなところで何してた
の?」

「特に何かをしていたわけではないが、強いて言うなら人探しだな」

「人探し? 誰かとはぐれちゃったんだ?」

「いや、そういうわけじゃない。千島みたいなオレ以外のゲームの参加者を探していたんだ」

「え？ ゲームの参加者？ 私が？」

「ああ。首輪がついているから、おそらくそうだろう」

オレは自分の首輪を示しながらそう言った。

「首輪・・・、あ、あった。これのことね？」

千島は自分の首のあたりをまさぐって、首輪を確認した。

「おそらくそうだろう。オレは自分の首輪を見たわけではないから、確かなことは言えないがな」

「それで、これってどんなゲーム？」

「詳しくはPDAに書いてあるが、要は生存を賭けた殺し合いみたいなものだ」

「え・・・、こ、殺し合い！？・・・ていうか、PDAってどこにあったの？」

「ん、オレが寝かされていた部屋にあったが？」

「私それ持ってない・・・」

「なんだと!？」

「い、いや、そんなに驚くことかな・・・」

「これがないと首輪が外せない。そして、首輪が外せないということとは死を意味する。これでPDAを持っていないことの重大さがわかったか？」

「私、今すぐ取りに戻る」

「オレもついて行っていいか？」

「うん、いいよ。こっち！」

そう言って、千島はオレが来た方とは逆の通路を示してそちらへ向かって走り出し、オレはその後について行った。

第1話 少年と少女（後書き）

掲載しておいてなんですが、一か月以内に大事な試験があり、その後には中間試験があるため、それらが終わるまではあまり頻繁には更新できないと思います。

一週間に1話くらいは更新できるように頑張りたいと思いますので、気長に待っていただければと思います。

第2話 知るが故の過ち（前書き）

とりあえず既に書き溜めてた分をちよこちよこ掲載していきます。

第2話 知るが故の過ち

「よかった！ まだあった！」

オレたちが入った部屋には、1台のPDAが置かれていた。

「持っていていかれていなくてよかったな」

「うん！ ありがとね、PDAのこと教えてくれて」

「気にするな。それに、オレはそれに書かれているルールが知りたかったからな」

「ルール？ ちょっと待ってね・・・、あ、これのことだね。うーんと、1と2と3と9が書かれてるみたい」

「そうか。なら、3と9を教えてもらえないか？」

「・・・う、うん・・・」

「なんだ？ どうかしたのか？」

「いや、ルールに物騒なことがいっぱい書いてあるなって思って・・・」

「確かにな。だが、ここに連れてこられて、こうして首輪やPDAが用意されている以上、それらが嘘だと笑い飛ばすことはできない

だろう」

「そつだよね……。っと、ルールね、はい」

読み上げてくれるだけでよかったのだが、千島はPDAをオレに差し出した。

「……少し借りるぞ」

<ルール3>

PDAは全部で13台存在する。

13台にはそれぞれ異なる解除条件があり、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。

この時のPDAに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。

他人のカードを奪っても良いが、そのカードの条件で首輪を外すことは不可能で、

読み込ませると首輪が作動する。

あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。

<ルール9>

それぞれのカードの解除条件は以下の通り。

A 2日と23時間他のプレイヤーを傷つけない。罨にはめること

は可。なお、このPDAのみ館内のすべての罠の位置がわかる。

2 JOKERのPDAの破壊。また、PDAの特殊効果で半径1メートル以内ではJOKERの偽装機能は無効化されて初期化される。

3 首輪とPDAを合わせて7つ以上取得する。ただし、首輪は最低でも2つ必要。

4 4名以上の殺害。手段は問わない。

5 館全域にある24個のチェックポイントを全て通過する。なお、このPDAのみ地図に回るべき24のポイントが記載されている。

6 JOKERの機能が5回以上使用されている。自分でやる必要は無い。近くで行われる必要も無い。

7 総計60時間以上他のプレイヤーに姿を見られない。姿を見られた場合、1時間以内に相手を殺害すれば免除。

8 自分のPDAの半径5メートル以内でPDAを正確に5台破壊する。手段は問わない。6つ以上破壊した場合は首輪が作動する。

9 「ゲーム」の開始から6時間目以降で、12時間以上行動を共にした人間1人以上の殺害。

10 5個の首輪が作動していて、更に5個目の作動が2日と23時間の時点よりも前に起こっている。

J 「ゲーム」の開始から24時間以上行動を共にした人間が2日

と23時間時点で生存している。

Q 2日と23時間の生存。

K 『A』、『10』、『J』、『Q』のPDAの取得。

ルール3には首輪は初期配布されたPDAでないと解除できないことが、ルール9には全てのPDAの解除条件が書かれていた。なるほど、確かに読み上げるには少々長いかもしれない。

「ありがとう。だが、PDAは人に手渡さない方がいい。盗られたり、最悪の場合は壊されたりするかもしれないぞ」

「そ、そっか。そうになったら大変だね。うん、次からはそうする」
オレにそうされるかもしれないと危惧したのか、千島は差し出したオレの手の中から素早くPDAを抜き取った。

「それと、オレの方に書かれていたルールだが、千島と違うのは5と7だな」

オレはその2つを読み上げる。

「ふーん、開始から6時間経つまでは戦闘禁止で、進入禁止エリアってというのがあって、2日目からそれがどんどん下から迫ってくるのね」

「そういうことだな」

「それで、これからどうしよっか？」

「オレはルールを全部知るために、まだ会っていないプレイヤーに接触しようと思う」

「じゃあ私もそれについて行っていい？」

「オレにPDAを盗られたり、殺されたりしてもいいというのなら構わないが」

「・・・そんなことするの？」

「切羽詰まったら人間何をするかわからないからな」

「そんなこと言ったら誰とも一緒に居られないよね」

「そうだな。裏切られるのが怖いのなら1人で行動することだ」

「なら、私は村崎君と一緒に行くよ」

何が、なら、なのかは全く分からなかったが、どうやら千島はオレと行動を共にすることにしたらしい。

「そうか、じゃあ行くでしょう。6時間経つ前にできるだけルールを把握しておきたいからな」

そして、オレたちは他の参加者との接触を図るために、まだ進んでいない方へと歩き出した。

だが、その後は誰とも会おうことなく、とつとつ開始から6時間が経ってしまった。

ピロリン ピロリン ピロリン

「あれ？ なんだろ？」

オレと千島のPDAが同時に鳴る。

「・・・メールが来たのか？」

画面では、メールのマークが点滅していた。試しにそれに触れてみると、メールが開かれた。

『ゲームの開始から6時間が経過しました。これより戦闘禁止エリア以外での戦闘を許可します』

「・・・始まつちやったね」

「そうだな・・・。ここからは本当に何でもありだ。もし一緒に行動するのが怖くなったのなら、ここで別れよう」

「うっん、大丈夫。村崎君はきっとそんなことする人じゃないよ。私の勘がそう言ってる」

「ふん・・・。随分と当てにならない勘を持っているんだな」

「え・・・？」

千島がオレの襲撃に備えてか、一步下がる。もっとも、戦闘の素人がそんなことをしても無駄なのだが。

「オレには目的がある。そのためには人殺しもする。逆に殺されるかもしれない。オレについてくればそういう血の惨劇を見ることになるだろうが、それでもいいのか？」

「・・・そうなんだ・・・。うん、大丈夫。そうなりそうになったら逃げるから」

「逃げられればいいがな。・・・まあいい、オレは別にお前がついてきても何の支障もないんだ。このまま行くか」

「うん。・・・さすがにこんな建物の中で1人なんて、怖いよ・・・」

返事後の声は小さすぎてオレには聞こえなかった。

「ん、何か言ったか？」

「ううん、なんでもない。それより、これからもまだ1階を歩くの？」

「それもそうだな。そろそろ2階に上がってもいい頃か」

ゲーム開始から6時間も経てば、2階以上にいる人物が多くて不思議はない。多ければ半数以上が既に2階に上がっているだろう。

「よし、2階へ行くことにしよう」

「うん、わかった。じゃあ、一番近くにある階段は・・・っと、なんかバツ印がついてるけど、これって大丈夫かな？」

それを聞いて、オレは開かれたままだったメールを閉じ、代わりに地図を開く。

「ちょっと待て・・・、そうだな、仮にここが通れなかったとしても、近くにバツ印の付いていない階段があるから、確認のために行ってみる価値はあるかもな」

「じゃあそうしよっか」

そう言つて千島はオレの前を歩き出す。・・・実に無警戒だ。オレに後ろから殴り倒されるとは微塵にも思っていないのだろうか？

そんなことを思いながら、オレは千島の後について行った。

「ねえ、村崎君のPDAってなんなの？」

階段へ向かう途中、いきなり千島がそんなことを訊いてきた。

「・・・お前は馬鹿か？ そんなもの、教えるわけがないだろう」

「そうかなあ？ 私のは別に言ってもいいんだけど」

それは解除条件が楽な者の言葉であり、オレのように解除条件が厳しい者は、わざわざ公開して不利になるうとは思わない。

「じゃあ言ってみろ」

「そしたら教えてくれる？」

「そんなことはない」

「じゃあ言わない」

「結局言えないんじゃないか」

「そんなことないよ。ただ、私だけ教えるのはなんかなーって思っただけ」

「要は自分の解除条件を教えることで、相手のそれを聞き出したいんだろっ？」

「そういうわけじゃないんだけど、なんか私だけ言っのって損した気分だもん」

「そういうものか？」

「そういうものなの。ところで、バツ印っていうと、なんだろうっ・・・、封鎖されてるとか、近付くと危ないとか、そんなイメージがあるよね」

「そうだな。おそらくそのどちらかなんだろうが、後者なら、階段は封鎖されていないかもしれない。もしそうなら、そこに仕掛けてある罠などの危険さえ取り除くことができれば、通ることができるかもな」

「でも、わざわざそんな危険を冒してまで通ることないよね。近くにまともな階段があるんだし」

「ここはそうだがな。だが、他にもバツ印のついた階段はあるだろう。ほぼ対角線に位置する階段などを通れるようになれば便利なのに、これはそこだけに限らないが、他のプレイヤーに待ち伏せされにくい」

「あ、そっか。地図上では通れない場所ってなってるから、人が来ないんだ。じゃあやっぱりまともな階段を上らないとね」

「・・・なんでそうなるんだ？」

「だって、他の人たちに会うのが目的なんですよ？」

「それはそうだが、ゲーム開始から6時間が経った以上、相手が攻撃を仕掛けてこないとも限らないんだぞ？」

「でも、仕掛けてこないかもしれないよね。そんなのはまず1回会ってみないと分かんないし。ものは試しだよ」

「その1回で殺されなければいいがな」

「大丈夫だって。私、けっこう逃げ足は速いから」

そこでオレは、ようやくオレと千島の持っている情報に大きな差があることに気付いた。

「……そうか、千島は知らなかったな」

「え？ なにが？」

「このゲームはなんにも素手だけで戦うわけではない。刀もあれば弓もある。拳銃には銃まで存在する。それらから逃げ切るのは、はっきり言って無理だろう」

「……」

「それでもまだ、どんな奴とでもまずは話してみようと思うか？」

オレはそう質問したが、千島から返ってきたのはそれに対する答えではなく、オレへの質問だった。

「……ねえ、村崎君はなんでそんなにこのゲームに詳しいの？」

（しまったな、少々喋り過ぎたか……）

とはいえ、今更言ったことを訂正したり取り消したりはできない。

「……前に、このゲームに関する情報をたまたま拾ったことがあってな、それで知ったんだ」

結果、本当のような嘘のような曖昧なことを言っでごまかすことにする。だが、千島はオレのそんな曖昧な回避を許さなかった。

「でも、さっきの村崎君の口調はまるで実際に経験したことがあるみたいだったよ。ルールも全部本物だって思っつて、それを全然疑ってない。確かに首輪やPDAはあるけどさ、それだけで全部本物だって決めつけちゃうのはどうなのかな。書かれてるのは常識では考えられないようなことばっかりなのに。普通ならそんな情報はただのデマだって笑い飛ばすくらいじゃない？」

子供だましは一瞬で核心を突かれ、あっけなく砕け散る。仕方なく、オレは信じてもらえるもらえないは別にして、本当のことを話すことにした。

「…経験したことはない。だが、本当だと信じるに足る要素を、オレは持っている」

「それって何？」

「家族が、オレの兄貴がゲームに参加したことがある。その時に兄貴が撮った写真も見せてもらった」

「っ……でも、そんなのただの他人の言葉だし、写真だつてどこか他のとこで撮ったものかもよ？」

「確かに、お前にとってはなんてことないただの他人の言葉かもしれない。だが、オレにとっては他でもない兄貴の言葉だ。そして、オレは兄貴が決してこんなたちの悪い冗談を言うような奴じゃないということをよく知っている。写真の方は何とも言えないな。だが、そこに入っていた日付は間違いなく兄貴が修学旅行に行っていたはずの日だった」

「……まあ、これは日付をずらしたカメラがもう1台あればできな

いことはないが。

「でもっ……」

「別に千島にもこれを信じると言っているわけではない。自分が目にしたものだけを信じ、周りの言動に流されないのも素晴らしいことだとオレは思う」

「……じゃあ、このゲームが本物だってわかったら、村崎君のことを信じてあげる」

「そうか。だが、これらの話は全て作り話で、実は組織の関係者だったりするかもしれないぞ？」

「もし村崎君が本当に組織の関係者なら、そんなこと言わないよね」

「そうかもな。……いつまでもここで話していても仕方ない。オレは行くぞ」

そう言っつて、オレは千島の横を抜けて、目的地へと向かう。

「あ、待ってよ！ 私も2階までは絶対ついてくつてばー！」

なんだかんだ言っておきながら、結局千島はオレについてきた。

第3話 真実の証明

「封鎖されていて、尚且つ無闇に近づくと危険、か。厄介だな・・・」

オレたちはバツ印のついた階段のところに来ていた。

「でも、さつき村崎君が言ってたように、この有刺鉄線付きの瓦礫さえどかせられれば2階へ上がれるかもよ?」

「なんだ、千島はわざわざこんな危険なところから上る必要はなかったんじゃないのか?」

「む、別にそんなこと言ってるじゃないよ。もし待ち伏せされて襲われたら使わなきゃいけないかもしれないし。ただ、最初は普通に安全でみんなが通る階段を上るって言っただけ」

「それで、知らない人を見つけたら話しかけるんだよな。まずは自己紹介からか?」

「うー、もう、知らない!」

オレのことを信用したわけではない、それどころか、むしろ不振がっているのだろうが、こうして普通に会話をしてくれるのは正直ありがたかった。会話が無いのには慣れているとはいえ、それは飽く迄も近くに会話をする対象がない状態での話だ。さすがに会話もなしにただ隣を歩かれ、目的地に着いても何も喋らないのでは気が

滅入るところだった。

「とりあえず、現状ではこんなところを上るのは到底無理だな。普通のバツ印がついていない階段の方へ行こう」

オレたちはその場を離れ、2階へ上がるために再び歩き出した。

そして、それから何事もなく階段に到着し、オレたちが2階へ上がった時。その時に、このゲーム、つまり、ルールや解除条件が本物であるということが示された。

幸か不幸か、プレイヤーの死体という最悪な物的証拠をもって・・・

「何、これ……。ひどい・・・」

千島は口に手を当てて、そう呟いた。

事実、目の前にあったオレより少し年上かと思われる少女の死体は、非常にむごいものだった。

服から露出した手足や顔にはいくつも青痣があり、後頭部はぱっくりと割れていた。おそらく、鉄の棒か何かで強打されたのだろう。辺りに飛び散った血の中には固まりきっていないものもあったので、殺されてからまだそれほどは経っていないと思われる。

辺りを見回してみると、少し離れたところにPDAが落ちていた。

まだわかっていないルールを知ることができるかもしれないと思って拾ってみたが、画面が割れていたので壊れているの是一目瞭然だった。

「・・・PDAが壊れているってことは、これをやったのは8のPDAの所有者の可能性が高いな」

「なんで・・・あ、そっか。解除条件がPDAを5台壊す、だから・・・」

「そういうことだ。ひよつとしたらわざと壊したわけではなく、争いの最中に偶然壊れただけかもしれないが・・・まあ、これでこのゲームが少しは本物だとわかつたんじゃないか？ 方法としては最悪だがな」

「そう・・・だね。さすがにこんなの見せられたら、信じるしかないよ・・・」

オレの言葉に千島は弱々しく頷いた。

「それより、早くここから離れよ」

「そうだな。こんなものは見ていて気持ちのいいものでもないし、さっさと離れることにするか」

本当はもう少し現場の状況を確かめたい気持ちもあったが、千島がここを離れたがつているのと、殺された人物が女性であることも相まって、オレはそれを断念した。

いくら死体とはいえ、男のオレが少女の体を隅々までチェックする

わけにもいかないしな。PDAが壊れていたことがわかっただけでも良ししよう。

しばらくその場から少し離れた部屋で休憩して、だいぶ千島が立ち直ってきたところで、オレは立ち上がって話を切り出した。

「オレはそろそろ行くが、千島はどうする？」

「村崎君について行く。こんなこと、一人で歩きたくないよ……」

「……そうか。好きにすればいい。だが、歩くときは横を歩いてくれ。背後に立たれるのはさすがに遠慮したいからな」

「うん、わかった。そうする」

そう言って、千島も立ち上がる。

そして、オレたちはまずは襲われたときに抵抗できるように、武器を探すことにした。

・
・
・

ここは同じ2階だが、斎たちがいる場所とはそれなりに離れた場所。そこに、女性にしては背が高めで、長い黒髪を後ろで縛っている1人の少女がいた。

彼女、九條彩菜くじょうあやなは2階への階段下で、階段を上がってすぐのところで行われていた惨劇の一部を、偶然通りかかった際に聞いていた。

・ ・ ・

彼女がそこに来たとき、階段上では既に争いが始まっていた。

『きゃあ！ やめて、やめてください！』

『ならさっさとPDA出せよ！』

『さっき見せたじゃないで・・・痛っ、痛いです！』

『そいつを俺によこせって言ってるんだよ！』

『でも、そんなことしたら私の首輪、外れなくなっちゃいます！』

『そんなこと知るかよ。いいからっ、出せよっ！』

ゴソツ、と鈍い音がして、上から少女の悲鳴が聞こえなくなった。

『はあっ、はあっ……。やっとくたばったか。まったく、馬鹿な女だぜ。素直によこせば死なずに済んだかもしれないねえのによ』

・ ・ ・

そこまで思い出して、私は頭を振ってあの時の音声を頭から追いやった。

「だめ……。気を張っておかないと、ついあの時のことを思い出してしまう」

その後、男の方が立ち去る音を聞いてから、私は2階に上がった。

そして、そこに倒れていたまだ頭から血を流している少女の姿を確認し、すぐにそれから目をそむけた。その姿はあまりにも痛々しく、とても見ていられなかった。

「私も、いつかあんなことを……」

声を出してから、またあの時のことを考えていたことに気づき、再びその考えを頭の隅に追いやる。いつかは考えなければならぬこ

とかもしれないけれど、今はまだそんなことは考えたくはなかった。

自分が、人を殺さなければならなくなるかもしれないということをして、

「あ、食料……」

目的もなくただ建物の中をさ迷い歩いてた彼女は、ある一室で真新しい段ボールに入った食料を見つけた。食料と言っても、その全てが缶詰だが。

「とりあえず、何か食べよう……」

段ボールの中に一緒に入っていた缶切りで魚の缶詰を開け、口を切らないように注意しながらそれを啜る。なぜ啜るのか、それはもちろん、缶切りまでついていながら、箸は入っていなかったから。親切なのか不親切なのかよくわからない。

ちょうど1つ食べ終えたところで、私は誰かが近づいてくる足音を耳にした。

「……っ！」

段ボールを素早く元に戻し、既に取り出していたものはバッグに詰め、部屋の奥にあった大量の段ボールの陰に身をひそめた。

しばらく息を殺して、その場で身じろきすらせず待機する。運のいいことに、その足音は部屋に入ってくることなく、ここから遠ざかって行った。

「はあ・・・」

私は安心して段ボールの陰から出て、ため息を吐いた。

さつきからこんなことが何度もあった。誰かの足音や話し声、独り言が聞こえるたびに、私は見つからないようにとその場から足音を忍ばせて離れたり、今回みたいに身をひそめたりしていた。

「それもこれも、全部このPDAの解除条件のせい・・・」

私はポケットからPDAを取り出し、解除条件が書かれている画面を開く。

そこには、何度見ても同じく、『解除条件：総計60時間以上他のプレイヤーに姿を見られない。姿を見られた場合、1時間以内に相手を殺害すれば免除』という文字が表示されていた。

ついでにルールの方も開く。そこにも解除条件と同じく、既に見慣れた文字が並んでいる。書かれているルールは1、2、5、6の4つだ。

既で紹介したものは省きます

<ルール6>

開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人間を全て勝
利者とし、

20億円の賞金を山分けする。

最初はこんなものは何かの冗談だと思い、あまり気にしていなかつたけれど、万が一本当だった時のためになるべく他人と接触しないようにしてきた。でも、階段上で起こったことをきっかけに、そんな甘い考えは放棄すべきだと思った。自分はどうであれ、このゲームに積極的に参加することを決めた人がいるのだ。そんな人と出会ったら、こつちに何の非がなくても殺されるかもしれない。・・・あの少女のように。

そう思うと、尚更他の人に見つかるわけにはいかないと思った。元々他人と接するのは苦手だし、他人のことなんてどうでもいいと思う。でも、殺すのはさすがに抵抗があるし、だからといって殺されるのはもつと嫌だ。

そして、それらから出された結論が「このまま誰にも見つからずに3日間過ごす」というもの。初めのうちこそこんなにも広い建物の中で他人に見つかるわけがないと思っていたけれど、実際に接触しそうになったのはさっきの人でもう既に4人目。予想以上にここには人が多いのかもしれない。

「それとも、ここに書かれている地図自体が偽物・・・？」

その可能性も考えられるけれど、2階に上がってからはこの地図に沿って歩いてきたけれど、未だに道が違ふところは発見できていな

い。だから、おそらくこれは本物で、そうになると、他のルールや解除条件も全部本物。・・・考えたくもないけど。

お金は決して欲しくないわけじゃない。でも、いくらなんでも20億なんて額は大金過ぎて、逆に欲しいなんて思えない。

「・・・ここですっと考えててもしょうがないし、そろそろ行こうかな」

再び段ボールを開けて、重くなり過ぎない程度の量の缶詰をバッグに詰め込む。

そして、私は通路に誰もいないことを確かめてからその部屋を出て、また建物の中を当てもなく歩き始めた。

第4話 手助けとなるもの

武器を探すこと1時間。しかし、目的のものは一向に見つかる気配がない。

2人が歩いてきた道には部屋が少なく、その上、そのどこに入っても中にあるのはガラクタの詰まった段ボールだけ。地図を開いてみたが、階段のところからしばらく適当に進んでいたのも、ここがどこかもわからない。引き返そうかと思っただが、当然来た道もわからないので、断念せざるを得なかった。

「……全然身を守れそうなものがないね」

「そうだな。せめてオレたちも鉄の棒の1本くらいは欲しいところなんだが」

未だに、手元にある武器は千島の手荷物の中にあつた先の丸い鍔はのみが1本。使えないなんてレベルじゃない。まだそこら辺に転がっているガラクタを投げつけた方が攻撃力が高そうだ。だからと言って、それらを拾うわけではないが。

ただひたすらこの広い建物の中を、武器を探して歩き回る。そしてようやく1つの部屋で、目的のものではなかったが、使いようによつてはそれ以上に役に立つものを発見した。

「これ……、なんだろ？」

部屋の中にあつた真新しい段ボールを開けた千島は、その手に持った黒い小さなものをオレに見せた。

「さあ、なんだろうな。表面に文字が書いているようだから、読んでみたらどうだ？」

「んー、と……、『Tool-MapEnhance』と『Tool-PlayerCounter』って書いてある」

「地図の拡張と、……プレイヤーカウンター？　なんだ、それは？」

「さあ？　私にもわからないよ」

それらの扱いに困っていた時、オレたちに1通のメールが届いた。

「ん、またメールが……」

今度はその黒い小さなものの説明だった。

『今あなた方が手に入れたのは、PDAにソフトをインストールすることのできるツールボックスです。どのPDAにもインストールできますが、1つにつき一度しかインストールできないので、誰がどのPDAに使うか十分に注意しましょう』

「……だって。どうする？」

「そうだな……、試しに1つずつインストールしてみるか？」

「そうしょっか。じゃあ私はこのプレイヤーカウンターって方をイ

ンストールするね」

「そつちでいいのか？」

「うん、いいの」

返事をした千島は、既にPDAにツールボックスを接続していた。

それを見て、オレも千島からもう一つの方を受け取り、作業を始める。PDAの横にあるSDカードが差せそうなところに地図拡張のツールボックスを差すと、画面が切り替わり、「このソフトウェアをインストールしますか？」という文字と、その下に「YES」と「NO」の文字が表示された。「YES」の方に触れると、「インストール中です。ツールボックスを抜き差ししないでください」という文字と一緒に、インストールの状況を示すバーが表示された。それは直に100%になり、今度は「インストールが終了しました。ツールボックスを抜いてください」と出たので、指示に従ってツールボックスを抜き取る。

「終わった？」

オレの様子を見て、千島がそう確認してきた。

「・・・ああ、インストールされたみたいだ」

確かめるために地図を開くと、あちこちの部屋から線が伸びて、その先に部屋の説明があった。何の説明も出ていない部屋は、おそらく何も無い部屋だろう。似たような部屋でも『倉庫』と書かれていたり、『寝室』と書かれていたりする部屋もある。

「こっちは文字通り地図の拡張だな。地図の中の部屋に説明がつくようになっただくらいか」

「こっちはスタート画面に『残り12人』って表示されてるから、残ってる人の数かな？」

「そうだな。ルール9から見て、プレイヤーはおそらく13人。減った1人はおそらくさつき階段で死んでいた少女だろう」

その言葉でまたあの光景を思い出したのか、千島は顔を伏せた。が、すぐに顔を上げ、無理に明るい声で話しかけてきた。

「それじゃあ、次はどうしようか？ 地図にいろいろ出てるなら、そのどれか1つの部屋に行ってみない？」

オレはその千島の努力を無駄にしないためにも、その話の転換にすることにした。

「そうするか。じゃあまずはここから一番近い『倉庫』に行くことにしよう。こっちだ」

地図上の部屋に説明が出たおかげで、だいたいだが現在地を把握することができた。おそらく、現在地は何の説明もない部屋が続いている地図の中央右寄りの辺りだろう。幸いにも先は行き止まりにはなっていないので、とりあえずこのまま今まで通り進み、それから一番近い部屋を目指すことにした。

そして15分後、オレたちは再び真新しい段ボールを見つけ、それを開けると、今度はいくつもの缶詰が出てきた。

「武器じゃないけど、食料ならあったね」

「そうだな。まあ腹も減ってきたところだし、ちょうどいいんじゃないか？」

「あ、やっぱり？ 実は私もそろそろおなかが空いてきたところだったんだ。さつそく食べよ」

千島は中からプルタブのついた缶詰をいくつか取り出し、そのうち3つをオレに渡し、2つを自分のもとに置いた。

「それじゃあ、いただきます」

千島はさつそく缶詰を開けて食べようとしたが、オレはその前に1つ質問をした。

「待て、箸やフォークとかはないのか？」

「うん。入ってなかったけど、嚼っちゃえばいいんじゃない？」

「……大抵の女子は食べ方とかを気にすると思っていたが、千島からはその食べ方に対する恥じらいがまったく感じられないな」

「……何？ 恥じらって欲しいの？」

「別にそういうわけでもないが、気にならないのか？」

「だって、ないものはないんだもん。しょうがないよ」

「そういうものか？」

「そういうものの。今のこの状況で形振りなりふなんて構ってられないよ」

そう言って、今度こそふたを開け、中身をずずず、と音を立てて啜る。女らしさがまるでない。・・・まあ本人が気にしていないのならしいが。

そのままじつと見ていてもしょうがないので、オレも自分の缶詰を開けて、その中身を丸ごと口の中に放り込む。

「あ、ずるい」

「あぬいあふあ（なにがだ）？」

「丸ごと食べるなんて、インチキでしょ」

「んぐ・・・、インチキも何も、どんな食べ方をしようがオレの自由だろう」

「そんな風にほつぺた膨らませて食べるのは行儀が悪いんだよ」

「いや、音を立てて啜るのと大して変わらない気がするが・・・」

「大違いです！ 音を立てて啜るのはお茶の作法の1つだけど、ほつぺたを膨らませて食べるものなんてありません！」

「いや、これはどうみてもお茶ではないからな。それと、さっきまで形振り構っていられないとか言っていた奴がそれを言うか？」

「これを礼儀正しく食べられないから、せめて他の作法では礼儀正しい食べ方をしてるの！」

その考え方はまったく理解できなかったが、それならばと思い、オレは食べ方を変えることにした。

「わかったわかった、こうすればいいんだろ」

オレは次の缶詰を開けて、今度は手づかみでそれを口に運ぶ。

「料理を素手で食べるなんてのはあちこちの国で行われている慣習だからな。これなら文句はないだろう」

そう言ってやったのだが、肝心の千島はもう興味なしといった感じで、再び自分の缶詰を齧っていた。話を振っておきながら途中で放置とは、なんて奴だ。

そう思ったが、あまり突っかかるのも面倒で時間の無駄なので、オレも食べることに集中する。ちなみに3つ目は再び丸ごと口の中に放り込んだが、もう何も言われなかった。・・・結局こいつは何が言いたかったんだ？

わずかながら腹に物を入れ、体力と気力を取り戻したオレたちは、先程とは別の『倉庫』と書かれた部屋に来ていた。

そして、そこで日常生活ではほとんど目にするものがないものを見つけた。

「・・・ナイフ、だね」

「ああ、そうだな・・・」

今度の段ボールでようやく探していた武器が手に入ったのだが、それは予想外に殺傷能力の高いものだった。中に入っていたのは、刃渡り30センチ程度のサバイバルナイフ1本と、投擲用のナイフが3本、それと、一応料理用なのか、包丁が1本。鉄パイプよりずいぶん強いように思えるが、実際はいざ鉄パイプと戦った時に、これでは不利だ。包丁や投擲用のナイフはもちろん、サバイバルナイフでさえ鉄パイプを受け止めるにはリーチも込められる力も足りない。唯一優位に立てる方法は、投擲用ナイフで遠距離から相手を傷つけるというもの。正直、あまり気の進む手口ではない。

オレは無言で段ボールの中からサバイバルナイフと投擲用のナイフを1本取り出した。

「それ、持つてくの？」

「ああ、残りは千島の方だ。ちゃんと持つておけよ」

「え？ 私も持つの？」

「当然だろう。自分の身くらい自分で守れるようになっておけ」

「自分で守れるように……って、私こんなのまともに使ったことなんてないよ」

「オレもない。だが、持っていないよりは持っている方がまだマシだろう」

刃渡りせいぜい10センチ程度のナイフなら握ったことはあるが、さすがに銃刀法違反にもろに引つかかるようなものは握ったことはない。まあ、少し前にダガーナイフなども所持することが禁止されたようだが。

「そうかもしれないけど……」

「とにかく持つておくことだ。最悪の場合はオレが千島から武器を借りることになるかもしれない。だから、持つておいてくれ」

「……うん、わかった」

そこでようやく千島は首を縦に振った。

刃物を所持しているからといって、自分で使わなければならないというわけでもないということが、刃物を持つことに対する抵抗を弱めたのだろう。

オレは千島が刃物を腰に下げたのを確認してから、地図に目を戻した。

「次は……、少し休憩でも入れるか」

「うん、そうしょ。なんだか疲れちゃった」

そして、オレたちは徐々に近付きつつあった『戦闘禁止エリア』と書かれた部屋へ向かうことにした。

第5話 一人歩き（前書き）

書き溜めていた分はこれで終了となります。

第5話 一人歩き

千島は戦闘禁止エリア到着すると、「疲れたから寝るね」と言い残して、真っ先にベッドのある奥の部屋に入ってしまった。

俺も多少は疲れていたが、さすがに寝るのは不用心だと思ったので、ベッドのところまで行ったもののそこに寝そべることはせず、代わりにそこに腰を下ろした。

特にすることもなく暇になったので、眠気覚まし代わりにこれまでのことやこれからのことを考えることにする。

改めて考えてみると、部屋を出た当初の目的はほとんど達成できていなかった。ゲーム開始から今までずっと他のプレイヤーと接触しようとしてきたが、その成果はまったく言っていないほどなかった。実際に出会えたのは千島1人と、物言わぬ死体のみ。

「やっぱり、1人で行動した方がいいか・・・」

このまま千島と一緒に行動をしていると、いつまでたっても組織側の人間を見つけたことができそうにない気がする。1人ならもう少し歩くスピードを速められるし、休憩時間も短くて済むが、それが2人だと、さらにその相手が女性だと、かなりの差が生じる。現に今だって、オレ1人ならまだ先へ進めるが、千島は既に精神的にも身体的にも疲労困憊の状態だ。

しかし、足手まといだからといって、1人で歩くのが怖いという千

島を置いて行くのも気が引ける。それも、オレ自身千島と一緒に行動することに反対はしなかったので尚更だ。

「誰かほかのプレイヤーが千島と一緒に行動してくれれば助かるんだが……」

その時、オレは誰かが戦闘禁止エリアのドアを開ける音を聞いた。その直後に、かすかにだがシステムボイスも聞こえてくる。

オレは考え事をやめ、この新しく起こった出来事に集中した。

「……さて、こいつは敵か味方か。確かめてみるとするか」

オレはそつと立ち上がり、音を立てないように注意しながら半開きにしておいたドアのところまで移動した。慎重に隙間から向こう側を覗くと、そこには1人の少女がいた。身長は千島より少し高いくらいで、特徴はと言われれば、髪形をポニーテールにしていることと、辺りを警戒していることくらいだ。

ここに入った時に、ここが戦闘禁止エリアであるということシステムボイスで伝えられたはずだが、それでもなお警戒するのはさすがだな。

可能性はかなり低いと思われるが、既に首輪を外したプレイヤーがここに潜んでいるとも限らない。オレは一応それをチェックしたつもりだが、奥の部屋を全て覗いたわけではないので、もしかしたら俺たち以外の誰かがここにいる可能性もある。……まあ、現在ままで出てきていない時点で、その可能性はまずないだろうとは思っ

見たところその少女はまだ首輪をしていたので、出ていってもいきなり襲われることはないだろう。逆に、いきなり逃げられることはあるかもしれないが。

だが、もしかしたらオレの代わりに千島と一緒に行動をしてくれるかもしれないと思ったので、オレは話しかけてみることにした。

わざと音を立ててドアを大きく開けると、少女は素早くこちらを振り向いていつでも逃げだせる体勢をとったが、オレの姿を確認するとなぜか構えを解いた。

「驚かせて悪かったね。あたしは優木愛莉。アンタは？」

「ご丁寧にも。寧ろ驚かせたのはこっちだろう。オレは村崎斎だ」

「村崎斎・・・、ね。わかった、よろしく、村崎」

「ああ、こちらこそよろしく。ところで、いきなりで悪いんだが、オレの代わりに子守りをしてくれないか？」

「子守り？ 誰か子供でもここに居るのかい？」

「子供と言えば子供だな。ちょうどオレくらいの年齢の女子が1人、奥の部屋で寝ているんだが」

「・・・覗いたの？」

「いや、ここまで一緒に来たんだ」

「あつそう。それで、なんでその子の子守りをあたしに頼むんだい？」

「オレはそろそろ一人で行動したいんだ。だが、一人でここを歩くのが怖いという女子を置いて行くのも気が引けてな」

「なるほどね。それでたった今出会ったばかりのあたしにその子を押し付けて、アンタは子守りから逃れて自由になろうと」

「そう言われると身も蓋もないんだが、オレにはやることがあるんだ」

「それが何か・・・って訊くのは野暮なんだろうね。まあ、あたしはその子が構わないならべつにいいけど」

「なら決まりだな。それじゃあよろしく頼む。起きてきたときにオレのことを訊かれたら、一人で先に行ったと言っておいてくれ」

「了解。それで、その子は何て名前なの？」

オレはその問いに対して、口元に笑みを浮かべながらこう答えた。

「起きたらきつと自己紹介してくれるさ。じゃあ、オレは行かせてもらう」

「あ、ちょっと待って！」

「・・・なんだ？」

外へ出ようとしていたオレだったが、優木に呼び止められて足を止

めた。

「気を付けなよ。アンタを見たら襲いかかってくる奴がいるかもしれないから」

「わかっている。2階に上がってきたときに死体を見かけたからな。自分が殺される覚悟も、逆に人を殺さなければなくなる覚悟もしている」

優木はなぜか一瞬顔をしかめたが、すぐに元に戻って話を続けた。おそらく人が死んでいたという情報が初耳だったんだろう。

「それともう1つ。ルールの交換くらいしないかい？」

・・・すっかり忘れていた。そういえばルールを確認するために他のプレイヤーを探していたんだっただな。つい組織への復讐のことで頭がいっぱいになっていた。

「ああ、喜んで。オレが知っているルールは、1と2を除くと3、5、7、9の4つだ」

「そう。一つ被ってるけど、あたしの方は3と8だよ」

<ルール8>

指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

ルール8は、今いるこの部屋に関することだった。もっとも、システムボイスが同じことを忠告していたので、ルールに特筆するほどではない気がしたが。

ルール交換が終わった後、オレは戦闘禁止エリアを離れて、1人で歩き出した。

...

村崎が戦闘禁止エリアを出て行った後、あたしは1人ため息を吐いた。

「はあ……。村崎斎、ね」

彼はおそらく、あたしの知人の関係者だろう。

「まあそれはいいとして、問題はさっき村崎が言った、2階の階段付近で人を殺した奴の方だね。誰だか知らないけど、一番最初にゲームにのつたのはそいつで間違いないだろうね……」

あたしが2階に上がった時にはまだ死体はなかったから、そいつが2階に来たのはあたしより後だろう。

それにしても

「殺す覚悟も殺される覚悟も、どっちもしてほしくはないんだけどね……」

さきほど優木が顔をしかめたのは、そういった理由からだった。

「……でもまあ、今から気にしてても仕方のないことだし、とりあえずは休憩することにしようか」

まだどちらの覚悟も本気でしなればならない状況には陥ってはいないようなので、あたしは深く考えるのをやめて、体を休めることにした。

1時間ほどすると、村崎に任された少女が部屋から顔を出した。

てっきり村崎がいると思った場所にあたしがいたからか、寝起きの目をぱちくりとさせている。

「えっと、こんにちは。私、千島泉希です」

なるほど、村崎の言ったことは嘘じゃなかったね。確かにいきなり自己紹介してきたよ。

「ああ、こんにちは。あたしは優木愛莉。よろしく」

「うん、よろしくね。・・・ところで、ここに男の子がいなかった?。」

「村崎のこと? アイツならアンタを置いて1人でここを出てったよ」

「ええー!?!」

いや、こっちがええー!?!? なんだけど。ここ、そんなに驚くこと? こんな状況じゃあ他人を盲信するもんじゃないよ。

「一緒に行動してくれるって言ってたのに・・・」

千島が目に見えて落ち込んだので、あたしのせいじゃないのになんか申し訳なく感じてしまう。

「それで、まあ代わりと言っちゃなんだけど、あたしと一緒に行動しないかい?。」

「ほんと!?!? 一緒に行ってもいいの!?!?」

「べつにあたしは構わないけど。村崎もそう頼んできたしね」

「よかったあ。これからこの建物の中を1人で歩かなくちゃいけないのかと思っちゃった」

今度は目に見えて安堵している。感情表現が豊かだね。

「それじゃあ、改めてよろしくね。愛莉ちゃん」

「はいよ。それで、さっそくだけでもう出発する?」

「うん。村崎君に会って文句言わなくちゃ」

ああ、うん。それが目的なんだ……。まあいいけど。

「じゃあ行くうか。まずは……。そうだね、3階にでも上がる?」

「そうしよ。村崎君の地図は便利になってるから、きっとすぐに上の階に行っちゃうだろうし」

「便利に?」

「うん。ツールボックスの『地図拡張』ってやつをインストールしてるから」

「へえ、そう。じゃあ千島も何かインストールしてたりする?」

「私のも1つだけ。『プレイヤーカウンター』ってやつで、残りの人数が確認できるようになったみたい。今は残り12人ってなってる」

ということは、今のところ死んだのは村崎が見たっていう人だけだね。

「そういえば、千島も2階に上がったところで死体を見た?」

「うん……。全身あざだらけで、かわいそうだったよ……」

あまり思い出さなくなさそうだったので、あたしはそれ以上そのこ

とについて詮索するのをやめた。

「・・・さて、話はこんぐらいにして、これからは口じゃなくて足を動かそうか」

「そうだね。いつまでもここにいて、村崎君に追いつけなくても困るし」

そして、あたしたちは戦闘禁止エリアから出て、3階を目指すことにした。

ゲーム開始からまだ16時間ほど。この段階でもう3階を目指すなら、1日目が終了する頃には既に3階を歩いててもおかしくないね。

第6話 初めの第一歩（前書き）

明日はハロウィンですね。それにちなんで、先週は学内のコンビニで売っていたパンプキンシュークリームとかいろいろを食べましたプクプクです。

それはさておき、ハロウィンといえばスミスの出番といっても過言ではないのですが、今回はまだ出てきません。現在どんなエクストラゲームを行おうか思案中です。（おい、勉強はどうした

第6話 初めの第一歩

私は相変わらず1人で2階を歩いていた。というか、逆に1人じゃないと困る。

缶詰を手に入れた部屋を出てから一度だけ他の人の足音を聞いたけれど、それ以降は今のところ自分の足音以外は聞こえてこない。このまま何事もなく3日間を過ごせればいいんだけど・・・

しかし、そううまく物事が運ばないのが現実で、私はある部屋の中でついに他のプレイヤーと接触してしまった。それは、つい先ほどのこと。

．．．

私は当てもなく歩き続けて、そしてある一つの部屋にたどり着いた。私は他の部屋と同じように、中に誰もいる様子がないことを確認してから、その部屋に入る。

「あ、ここにもある・・・」

そしてそこにも、既に何度か目にした真新しい段ボールが置かれていた。それまでに見つけた段ボール　と言ってもまだ3つしか見つけていないけれど　はすべて食料だったので、これにも食料が入っているものだと思い込み、私はそれを開けた。

「え．．．、何、これ．．．」

しかし、その中身は今までとは違い、刃渡り20センチ程度のナイフが2本と、用途のわからない小さな黒い箱のようなものが入っていた。とりあえずその用途のわからないものをつまんで掌の上で転がしてみる。と、その時、PDAが鳴った。私はその音にビクツとしつつも、その音源がPDAだとわかるとなんだか少し安心した。．．．いや、ほんとは全然安全でもなんでもないんだけど。

PDAが鳴るってというのは、それだけで怖い。ルールがほとんどわかっていないから、どこかで知らないうちにルールを破ってたんじゃないかと不安になってきた。

恐る恐るPDAの画面に目を向けると、そこには封筒の絵が．．．メール？

その絵に触れてみると、画面が切り替わって、今私が手にしている小さな黒い箱のようなもの　ツールボックスと言うらしい　についての説明文が表示された。

どうやら、これはPDAにソフトをインストールできるものらしい。

試しに手に持っていたそれをPDAに差し込むと、『Tool-Trap Detectionをインストールしますか？』と画面に表示された。罨．．．、探知、でよかったっけ。あれ？　そもそも罨

なんてあるの？

それを確かめるためにはソフトをインストールしなければならなかった。私はそれをインストールすることにした。ありがたいことに、バッテリーの消費は極小だった。

数秒でインストールが終わったので、試しに地図を開いてみると、そこには以前は表示されていなかった赤い点と、そこから伸びている線にその場所にある罫の説明が書かれていた。

「うわ、すごい・・・」

1〜5階までは大した量の罫はなかったけれど、6階は罫だらけだった。やっぱり、進入禁止エリアに追い立てられて6階に移動した後、その逃げ込んだ人たちを一網打尽にするためにこんなに罫が仕掛けられているんだろうか。

私が地図に目を奪われていると、突然後ろから声を掛けられた。

「やあ、君もこのゲームの参加者だよな？」

「っ！」

その声を聞いて、私は固まった。いつの間にか私の背後に誰かが来ていたようだ。

まずい、見られた。どうしよう・・・

「・・・っ、・・・っ」

早く何とかしなければと思うものの、体が思うように動かせず、満足に声を出すことさえできなかった。

そんな私の様子を見て、怖がっていると思ったのか、その人はまた話しかけてきた。

「大丈夫、危害を加えるつもりはないんだ。僕は七瀬廉也。ななせれんや少し話をしたいんだけど、いいかな？」

そこで私はようやく後ろを振り向くことができた。

そこに立っていたのはメガネをかけた少年で、背は私とあまり変わらない。体格もそれほどがっしりとはしていなくて、見た目インドア派だ。

「えーっと・・・、何かかな？」

私はずっと黙ったまま観察していたからか、彼は居心地が悪そうに立っていた。

「・・・何の用？」

私は努めて冷静を装った声を出したけれど、その実心臓が早鐘を打っていた。だけど、それでいてどこか冷静に現状を見つめている自分もいた。

私は、徐々に自分の感情が凍り付いて行くのを感じた。

「ああ、ルールの交換をしたいんだ。それと、できればPDAのナンバーと解除条件も教え合いたいんだけど」

それに反対ではなかったので、私は知っているルールの番号を言う。

「私の知っているルールは1、2、5、6。そっちは？」

「僕の方は、1と2は共通だからいいとして、残りの2つは4と8だよ」

<ルール4>

最初に配られる通常の13のPDAに加えて1台ジョーカーが存在している。

これは通常のPDAとは別に、参加者のうち1名にランダムに配布される。

ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、

トランプの機能を他の13種のカード全てとそっくりに偽装する機能を持っている。

制限時間などは無く、何度でも別のカードに変えることが可能だが、一度使うと1時間絵柄を変えることができない。

さらにこのPDAでコネクトして判定をすり抜けることはできず、また、解除条件にPDAの収集や破壊があった場合にもこのPDAでは条件を満たすことができない。

「PDAは？」

互いにルールを交換した後、私は今度はPDAの番号と解除条件を訊く。

「そう訊いてくるってことは、僕が教えたら教えてくれるのかな？」
それに対し、私は頷く。

「・・・僕のPDAナンバーは2。解除条件はJOKERのPDAの破壊だよ」

「私の7。解除条件は、総計60時間以上他人に姿を見られないこと」

「・・・それ、本当なのかい？」

「本当。だから、こっちを向かずに後ろを向いて話してくれた方がいい」

彼はしばらく悩んでいたけれど、やがて、それじゃあ、と1つ提案をしてきた。

「なら、ドアを隔てて話すことにしようか。それなら問題ないよね？」

「うん、それでいい」

私の返事を聞いて、彼は部屋を出て、ドア越しに話しかけてきた。

「ところで、君の名前は？」

「・・・九條彩菜」

私は屈みながらそう答えた。

「九條さんね。さつきも言ったけど、僕は七瀬廉也よろしく」

「・・・」

誰かとよろしくする気などなかったので、私はその呼びかけに対して沈黙を返す。

「九條さん？ 聞こえてる？」

「大丈夫、聞こえてる」

私が返事をしなかったから聞こえていないかもしれないと思ったのか、彼はわざわざこっちに確認を取ってきた。たかがドア1枚で防げる音量など知れているのに。

「そうか、ならよかったよ。それで、話があるんだけど」

「・・・何？」

彼の話など興味なかったが、会話を続けさせるために聞き返す。

「さつきも言った通り、僕の首輪を解除するにはJOKERが必要なんだ。だから、もし九條さんがJOKERを手に入れたら、僕に渡してくれないかな？」

「わかった。見つけたら渡す」

私はドアと向かい合って立ち、ドアノブに手を掛けた。

「そうしてもらえると助かるよ。それじゃあ、僕はそろそろ行くから・・・」

「ちょっと待って」

ドアから離れようとした彼を、私は引き留める。

「ん、どうかした？」

「ちょっと渡したいものがあるんだけど」

「渡したいもの？」

「そう。ツールボックスっていう、黒い箱のようなもの。今見つけた。2つあるから、1つずつインストールしよう」

「そっか、ありがとう。なら、ちょっと入るよ」

そして、ドアノブが回された瞬間、私は思い切りドアを前に押し出した。

「うわっ！」

ドアが体にぶつかって、彼が体勢を崩す。

私は、彼が体勢を崩したためにがら空きとなったその胸元に、屈んだときに段ボールの中から取ったナイフを深々と突き立てた。

「かつ・・・はっ・・・」

彼が口から血を吐き、それが私の肩に、服に、手にかかった。

私はナイフを突き刺したまま、彼を押し倒した。彼はまったく抵抗できず、重力に従うがままに後頭部を床に強打した。

既に彼は息をしていなかった。そして、床に血が飛び散った時、私は正気に戻った。

「あ・・・ああ・・・」

私は呆然とその場に立ち尽くした。

「そんな・・・、なんで、こんなこと・・・」

自分でやっておきながら、私は自分の行動が理解できなかった。

冷静に考えてみれば、彼に姿を見られていた時間は5分にも満たない。12時間までは人に見られても問題ないので、わざわざ殺すまでもなかった。

しかし、他のプレイヤーに見つかったことでパニックに陥った私は、冷静に考えることができなくなっていた。

その結果、感情を凍らせた私は、ただ本能に従って動いて　　殺してしまった。

私は誰かにこのことがばれるのを恐れて、そこから全速力で走り去

った。

かなり離れただろうと思われるところまで来て、私はようやく走るのをやめた。

尋常じゃない疲労を感じる。身体的にも、精神的にも。

しかし、こんなところで立ち止まっているわけにもいかないのだから、私はゆっくりとでも歩を進める。

そして今、私は相変わらず1人で2階を歩いている。というか、逆に1人じゃないと困る。

こんな血に塗れた姿を、人を殺してしまった後の姿を、誰かに見られたくないから。

私はシャワー室を探して2階をあちこち歩き回り、ようやくある一室にそれを発見し、シャワーを浴びた後、その部屋で泥のように眠った。

第6話 初めの第一歩（後書き）

書けば書くほど九條の性格がE P 1と違う・・・
まあ自分が殺す前に他人が人を殺す場面に居合わせて（？）怖気づいたとでも思ってください。

第7話 揃ったルール

戦闘禁止エリアを出て1時間ほど2階を徘徊していたところ、オレはまた新たな死体を見つけた。

その死体は、未だに左胸にナイフが刺さったままだった。後頭部も強打していたが、死んだのはおそらくこの刺さったままのナイフが原因だろう。

ナイフを抜き取ってみると、刃渡りは約20センチといったところ。上手いこと体に垂直に刺さっていたので、心臓まで届いていただろう。

「前と同じ奴・・・ではないだろうな。前回とは殺し方がかなり違う」

前の奴というのはもちろん、2階に上がってすぐのところまで少女を撲殺した奴のことだ。

向こうでは死亡者からのかんりの抵抗が窺えたが、今度の死亡者は全く抵抗した様子がない。それどころか、逆に油断さえしてたんじやないだろうか。そうじゃないと、普通はこんなにきれいに胸を刺されることなんてないだろう。

死体を分析するのはそれくらいにしておいて、今度は死体の持ち物を漁ることにする。・・・趣味が悪いだと？ 知るか。こんなところであつ倒れている方が悪いんだ。それに、どうせもう動かないんだ。それなら遺品だけでも有効活用してやった方がまだ救われる気

がしないか？

今度の死体は男なので、やりやすかった。そして、そのズボンのポケットに手をつ突っ込んだところ、そこにPDAがあるのがわかった。

オレはそれを引っ張り出し、画面を確認すると、そこにはハートの2が映っていた。

オレの知らないルール4やルール6が書かれているかもしれないという期待を込めてルールが書かれているページを開くが、残念ながらそこに表示されていたランダムのはルール7とルール9だった。

とりあえずそれを自分のポケットにしまい、今度は手荷物の方を探す。ところが、辺りを見回してみても壊れたメガネしか見当たらない。

「元々持っていなかったのか、それとも殺した奴に奪われたか・・・まあないものを探してもしょうがない。ここはもう放っておいて、次に行くか」

そして、オレは最初に死体のすぐ近くのドアが開いていた部屋に入る。そこには真新しい段ボールが置かれていて、その中に死体に刺さっていたのと同じものだろうと思われるナイフがあった。

「・・・これを見ると、こいつを殺した奴はここでこいつと出会って、そのまま勢いに任せて殺した、という可能性が高いな」

もしこれをやったのが殺すことに何の抵抗もない奴なら、PDAを回収したり、もう1本のナイフも持っていたりしているだろう。

もつとも、これは刺さっていたナイフがこのダンボールの中に入っていたものであるのなら、の話だが。

「・・・2階は大方歩いたな。そろそろ3階に行くか」

オレ2本のナイフのうち血の付いていない方を持って部屋を出て、今度は3階に向かって歩き出した。

そこから歩き出して30分ほど経った頃、オレは近くに何人かの集団がいるのに気が付いた。

「人数は・・・、3人といったところだな」

足音を聞き分けると、最低でも3人はいることがわかる。更に近づいてきた証拠なのか、時折話し声が聞こえてくるようになった。

「やり過ぎすべきか、それとも、接触すべきか・・・？」

相手が集団だということもあり、どうしようか少し迷ったが、話し合いの通じる相手ならルールが聞けるかもしれないと思い、警戒はしながらも会ってみることにした。

オレは通路を曲がったところで向こうが来るのを、サバイバルナイフを構えて待った。

直に、オレがいるのと反対側の通路からその集団が姿を見せる。

通路を曲がらずにまっすぐ行くつもりなのか、その集団の先頭はこちらを見なかった。

1人、2人、3人。予想通りだな。

先頭を歩いているのは、なかなか運動のできそうな背の高い少年だったが、その後ろを並んで歩いていた2人は、まだ自分より年下だと思われる少女たちだった。

しかし、相手を見た目で判断してはいけない。中学1年の時のオレでも、戦い方さえ覚えれば、そこら辺のチンピラどもを撃退するにとくらはできたのだから。

後ろを歩いていた少女のうちの片方がオレに気づき、声を上げようとしたところで、オレはその集団を呼び止めることにした。

「止まれ」

構えていたサバイバルナイフを相手によく見えるように上に掲げる。投擲用のナイフならともかく、10メートル以上離れている状態でこんなものを投げてもまともに当てることすらできないだろうが、こちらが武器を持っているということを示し、相手を威嚇することくらいはできる。

オレの声に反応し、今度は全員がこちらを向き、オレが武器を持っていることを確認してその場に足を止めた。

その時の相手の反応は、大きく分けて2つだった。

先頭を歩いていた少年は一步前に出て、腰からナイフを引き抜いてオレに向かつて構えた。少女のうちの1人は怯えてその場に立ちすくんでいて、もう1人は少年と同じように腰からナイフを引き抜き、こちらはオレに向かつて投げる構えをとった。

既に襲われたことがあるのか、それともただ単に反応がいいだけなのか、武器を構えた2人の動作は素早かった。

「1つ訊きたいんだが」

「・・・なんだよ？」

緊張した面持ちで少年が答える。

「オレと争う気はあるか？」

「当たり前だろ！ 無駄死には御免だからな！」

「なるほど」

その言葉を聞いて、オレはサバイバルナイフを腰につけていた鞘にしまった。

「・・・は？」

「死にたくないから戦うんだらう？ なら、互いに武器を手放せば話し合いができると思っただが」

オレの言葉に真っ先に反応したのは、さきほど武器を構えた少女だ

った。

「……うん、そうだね。あたしは西条紫音さいじょうしおんっていうの。お兄ちゃんは？」

「オレは村崎斎だ」

オレと西条の行動につられて、後の2人も自己紹介をした。少年は六巳むつみひろき広樹ひろきといい、もう1人の少女は西条詩織さいじょうしおりといった。

2人の少女は姉妹らしい。詩織が姉で、紫音が妹だそうだ。姉の方が妹より精神的に弱い……。いや、妹が強いんだろう。普通の少女ならあの場で立ちすくんだとしてもなにもおかしくはない。

また、運がいいことに、オレはまだ知らなかったルール4とルール6について知ることができた。

JOKERの存在について知れたのはいいが、ゲームの賞金が20億を生存者数で割ったものだとは……。まったく、ばかっているな。

「それじゃあ、オレはそろそろ行く」

「え！？一緒に行動してくれないの……？」

「オレはオレですることがある。悪いが、そういうことだ」

「待って！」

「近寄るな！」

「っ！」

オレを引き留めるためにこちらに駆け寄ってこようとした西条妹を、オレはとっさにナイフを抜いて牽制する。

さっきまでの会話の間も、オレは常に奇襲されないように注意しながら、3人とある程度の距離をあけて会話をしていた。

「もしお前たちがオレの存在を邪魔に思っているのなら、今ここで囲まれるというのはかなり厄介だからな。それ以上近付いたら攻撃する」

「私、そんなつもりじゃないよ！」

「お前はそうなのかもしれないが、他の奴らもそうなのかどうかはわからないだろう？」

「お姉ちゃんも六巳お兄ちゃんもそんなつもりじゃないよ！」

「解除条件は確認しあったのか？」

「それは・・・、ただだけど・・・」

「はっ！ そんな状態でよくそんなことが言えるな。ひよっとしたらお前らのうちの誰かが4や7のPDAの持ち主で、油断したところを殺そうとしているのかもしれないぞ。それとも9のPDAの持ち主で、お前たちと一緒に行動してから12時間以上が経つのを待っているのかもな」

「じゃあここで解除条件を見せ合えば・・・」

「それがJOKERかもしれないだろう？　そして、それを見分ける手段をオレたちが持ち合わせているとも限らない」

実際はオレが2のPDAを持っているため、それは可能なのだが、逆に言うと、それは向こうがJOKERを見分ける手段を持っていないということになる。

案の定、西条妹はオレの言葉を聞いて沈黙せざるを得なかったようだ。

「・・・反論できないようならオレは行かせてもらう。じゃあな」

オレは前を向いたまま少しづつ後ろへ下がり、角を曲がったところでようやく体の向きを元に戻した。その間、3人は誰も動かなかった。

・・・

「・・・紫音、やっぱりここからは2人で行動したほうがいいんじゃないかしら」

村崎さんが立ち去った後、私はずっと彼が去り際に言った言葉につ

いて考えていた。

「お姉ちゃん!?!」

「だって、村崎さんの言う通り、六巴さんのPDAが何かわからな
いんだもの! このまま一緒に行動していると、殺されてしまうか
もしれないわ!」

「詩織さん、落ち着いて! 俺のPDAはJなんだ! だから、俺
が2人を襲う理由なんてどこにもないんだ!」

六巴さんはそこで初めて自分のPDAのスタート画面を私たちに見
せた。そこには確かにJが映っていた、けれど

「そんなの信じられません! もしそれが本当なら、なんで最初に
見せてくれなかったんですか!? 今見せられても、まるでそれを
JOKERだと疑ってくれと言っているようにしか見えません!」

もう私は六巴さんのことを信用できなくなっていた。初めからあま
り信用していなかったけど、紫音がついて行くと言ったから私もつ
いてきた。でも、もう限界。私の身を守るためだけじゃなく、紫音
のためにも、六巴さんとはここで別れるべきだ。

「・・・紫音、行きましょう」

「あ・・・、お姉ちゃん・・・」

私は紫音の手を引いて、その場に六巴さんを残して歩き出した。六
巴さんは追ってはこなかった。

・ ・ ・

あたしはお姉ちゃんに手を引かれるままに歩いてた。

このままじゃいけないと思いつつも、お姉ちゃんの気持ちもわかるから、どうすればいいのか迷った。

・・・でも、やっぱりこんな良くない。せつかく協力してくれそうな人がいるのに、その人を自分から手放すのは自殺行為だ。

そう思い、あたしはどんどん先へ先へと歩いて行くお姉ちゃんの手を振り切った。

「・・・紫音？」

「お姉ちゃん、六巳お兄ちゃんのところに戻るう」

「なんで!？ あの人の近くにいたら殺されてしまつかもしれないのよ!？」

「でも、近くにいなかったら、もっと危ないかもしれないよ。今までは3人で、しかもそのうち1人男の人が混じってたけど、今度はあたしたち女の子2人だけ。どう考えても今のほうが襲われやすいよね」

「それは・・・、そうかもしれないけど、でも・・・」

「それとね、お姉ちゃん、あたしのPDAね、Aなんだ」

あたしはお姉ちゃんにダイヤのAが映っている自分のPDAのスタート画面を見せる。六巳さんのは信じなかったけど、あたしのならきつと信じてくれるはず。

「・・・それが、どうかしたの？」

「うん、さつき斎お兄ちゃんから全部のPDAの解除条件を聞いたでしょ？ その時に聞いたAの解除条件ってどんなのか覚えてる？」

「2日と23時間、他のプレイヤーを傷つけない・・・だったかしら」

「そう。つまりね、あたしたちが襲われた場合、まともに戦えるのはお姉ちゃんだけなんだよ。そんな状況でお姉ちゃんはあたしたちを守る？」

「それは・・・」

「相手が強い男の人とかだったら、あたしを守るところか、自分の身を守ることも難しいよね。だから、危険かもしれないけど、今まで一緒に行動してくれた六巳さんを信じて、これからも一緒に行動したほうがいいって思うの」

「でも・・・」

「お姉ちゃんが不安がるのもわかるよ。わかるけど、でも、ここは誰か頼りになる人に一緒にいてもらったほうがいいと思うの。だから、また3人で一緒に行こう?」

お姉ちゃんはしばらく考え込んでいたけど、やがて決心してくれた。

「・・・そうね、私1人じゃ紫音を守ることはできない、悔しいけどその通りだわ。戻ってまた一緒に行動してくれるか六巴さんに聞いてみましょうか」

「うん！　ありがとう、お姉ちゃん！」

急いで来た道を戻ると、六巴さんはまだそこにおいて何かうんうん唸って考え事をしてた。でも、あたしたちがもう一度一緒に行動してほしいというと、喜んで引き受けてくれた。

よかった、これで誰かに襲われたとしても、相手が1人なら六巴お兄ちゃんを盾にして逃げられる。

あたしは表面上は普通の笑顔を、心の中では悪魔の笑みを浮かべた。

第8話 好都合

私は目が覚めた後、部屋を見渡してそこが寝る前と同じ場所であることがわかり、さっきまでの出来事は夢なんかじゃなかったと改めて認識した。

まだこの手には、人を刺したときの感覚が残っている。

何度手を洗っても、それを拭い去ることはできなかった。

キモチワルイ……

気を緩めると吐いてしまいそうになる。

しかし、私はその衝動を無理矢理押さえつけて、横になっていた姿勢から立ち上がる。

いつまでもここにいると、また誰かと遭遇してしまうかもしれない。

私は傍らに投げ捨てていた荷物を拾い上げ、その部屋を後にした。

「こんなものまで……」

それから何個目かの部屋で、私はクロスボウを見つけた。

ご丁寧に1本目の矢が既にセットされていたので、見ただけで矢のセットの仕方が大体わかるようになっていた。

「これがあれば、もっと確実に……っ！」

慌てて殺人を肯定しようとしている自分を追い払う。

「なんてことを考えてるんだろう、私……」

しかし、頭ではこんなものはさっさと捨ててしまっか壊してしまっただ方がいいとはわかっているものの、私はそれを手放せなかった。

「……でも、威嚇用になら使えるし、これくらい持っってもいいよね……」

などと適当な理由付けをして、結局その武器を手に持っただまま建物内を歩くことにした。

その後、私は2階の探索もそこそこに、早く3階以上に行くことにした。

その理由は単純。偏ひんに上に行けば行くほど、他のプレイヤーと接触する可能性は低くなるだろうと思ったから。

とは言っても、自分が今どこにいるのかすらもわからないので、とりあえずはただひたすら歩き回っているだけだ。要は今までと何も変わっていない。

一度、少女たちの話し声が聞こえてきたけれど、その人たちは話し合った結果、私がいる方とは別の方向へ行った。私には時折一人の少女が上げる大声の内容しかまともに聞き取れなかったけど、遭遇することなくどこかへ行ってくれたので、とくにその内容については気にしなかった。

そして、この頃になると、いい加減地図を見ながら歩いたので、現在地がどのあたりかも予想がついた。

ここから階段まではそれほど遠くない。どうやら、適当に歩いている間も徐々に階段に近付いていたようだ。

私はさっきの少女たちと遭遇してしまわないように道を選びながら、階段へと向かった。

私が階段にたどり着いたのはそれから1時間ほど経った後のこと。そして、私が着いたとき、そこには既に先客が腰を下ろしていた。

金髪で目つきの悪い彼は、その手に鉄パイプを握っていた。もしかすると、2階で少女を撲殺した人かもしれない。

幸いにも彼はまだこっちに気が付いていなかったもので、私はしばらく様子を見てみることにした。

彼は腰かけている場所から周囲を油断なく見渡している・・・というわけではなく、どちらかと言えばぼーっとしているように見える。とは言え、周囲をまったく見ていないわけではなく、たまに思いついたようにあちこちに目をやるので、かえって裏をかきにくい。

それから待つことわずか5分。しかし、私にはそれが1時間にも2時間にも感じられた。

そして、いつまでもそこを退かない彼に対して、私は苛立ちを感じてきた。

このままここにいと、いずれ誰かがここに来て、私を発見するかもしれない。それこそ、さっきの少女たちなどはすぐ近くに来ていてもおかしくはない。

そう考えると、やはり悠長に待ってなどいられず、今すぐに彼をあそこから退かさなければ、という思いに駆られた。

私は手に持っていたクロスボウをゆっくりと目の位置まで上げる。

命を奪う必要はない、ただあの場所から退かすだけでいい。そうしない、危ないのは自分なんだから。

そんな言い訳をして自分の行動を正当化しながら、私は彼の顔の少し左の空間に狙いを定めた。

そして、ここだと思ったところで、私は1本目の矢を放った。

しかし、まだ一度も使ったことがなかったということと、私が当てて殺してしまうのを恐れたということが原因で、矢は狙いを大きく外れて階段横の壁に当たった。

私は彼が咄嗟にこつちを振り向くと同時に、通路の角に姿を隠した。

まずい、これじゃあ彼に自分の居場所を知らせただけだ・・・

そのままここにいると、通路の向こう側から彼が歩いてくる足音が聞こえた。やはりあの程度では尻尾を巻いて逃げてはくれなかったようだ。

「がっ・・・」

だが、私が急いでその場から逃げ出そうとした時、突然通路の向こう側からくぐもった唸り声が聞こえ、そのすぐ後に人が床に崩れ落ちる音と、鉄パイプが手を離れて落下したようなカランカランという音がした。そして、その後誰かが階段を駆け上がっていく音が聞こえた。

それを聞いて、私は駆け出そうとしていた足を止めた。

・・・彼が、倒された？

そっと通路の向こう側を覗くと、そこにはこつちに歩いてきていた彼が床に伏していた。

恐る恐る近寄ってみたけれど、起き上がる様子はない。

息はしていたので、死んではないようだ。

誰か知らないけど、これはチャンス。今のうちに上へ・・・

そう思い、私はそれ以上彼には構わずに急いで、しかし、彼を倒した人物が3階で待ち伏せされていないか確かめながら慎重に階段を上がった。

結果、上には誰もいなかったの、そこで私はようやく張っていた気を緩めた。

「えっと、今は・・・」

3階の地図を開き、現在位置を確認し、次に4階への階段の位置を探す。

「あつた。・・・やっぱり、そんなに都合よくはないよね・・・」

4階への階段は、ここから一番遠い場所、というわけではないが、かなりの距離はあつた。

しかし、千里の道も一歩から。そんな思いで、私は歩き出した。

・
・
・

オレが3人と別れて階段のところまで来た時、そこには1人の男がいた。

見るからに不良であるそいつは、その手に鉄パイプを持っていた。よく見ると、その一部が黒ずんでいる。最初は血かと思ったが、そう決めつけるのはやや早急な気がした。こんな薄汚い建物の中にあつた鉄パイプだ。汚れの1つや2つ付いていてもおかしくない。

それはさておき、あそこにいられると邪魔だな。階段に座っているということは、素直に通してくれる気はないのだろう。強行突破という手段もあるが、相手の実力もわからないうちからそんな無謀なことはしたくはない。

「さて、どうしたものかな・・・」

男は階段の2段目に腰かけ、後ろにもたれかかっている。それなら・

・

オレは静かにその場を離れて、遠回りしてそいつから見られない道を通り、階段から見て斜め後方の通路に移動した。

ここなら、相手から姿を見られることはない。まあ覗き込まれれば丸見えだが、階段の上でふんぞり返っているあいつはそんなことはしないだろう。それくらいの慎重さのある奴なら、まず座り込んだりはしない。

それに、もし仮に覗き込まれても、近くまで行けていればそこから

でも奇襲は成り立つ。まだ距離がある場合は、一旦逃げればいい。うまくいけば、相手をかかわして階段を上されるかもしれない。

オレは音をたてないようにじりじりと階段の方へ向かう。

そして、階段まであと10歩ほどというところで、オレがいる通路の対角線方向にある通路に矢が当たった。

「っ！」

オレは声こそ出さなかったものの、動きを止めてしまった。まさか、第三者がこの場に割り込んでくるとは想定していなかったのだ。

そして、動きを止めたオレとは逆に、階段の上にしたそいつは動き出した。

階段を下りて壁に当たった矢を一瞥し、そのまま正面に向かってまっすぐ歩いて行った。

反対側にいたオレの存在には気が付かなかったようだ。

これはチャンスだ。オレはそう思った。

行動するなら今しかない。そして、そのとるべき行動の選択肢は2つ。1つはこのまま階段を上がること。ただし、この場合2人から同時に狙われる可能性がある。そして、もう1つは、今歩いて行ったあいつを気絶させ、相手を1人にしてから確実に階段を上がること。

オレは迷わず後者を選んだ。リスクは小さい方がいい。クロスボウ

の矢程度なら距離があればかわすことができるが、そこに至近距離からの攻撃が加わったら、それは一気に難しくなる。

それに、歩いて行った奴は自分を大きく見せるためか、鉄パイプを引きずっているの、それによる音が俺の足音を消してくれる。

決断すると、オレはすぐに、しかし、なるべく静かに飛び出した。

少ない歩数で相手の背後をとり、その頭を組み合わせた両手で強打する。

「がっ……」

そいつは一撃で気絶した。最近組織の情報を集めるのをやめたため、不良どもと喧嘩していなかったが、どうやら腕は鈍ってはいないらしい。

オレは前を向いたままできるだけ急いで階段まで戻り、そして、階段を駆け上がった。

「ふう、後ろから撃たれはしなかったな」

オレは何事もなく階段を上ることができた。てつきり矢が飛んでくるものだと思っていたのだが……

「まあいい、おかげで楽に上がることができた」

せつかく何事もなく済んだのに、このままここにいて同じように階段を上がってきた矢を放った奴と遭遇しては意味がないので、オレは早々とその場を離れ、まずは周囲を探索しながら3階の戦闘禁止エリアを目指した。

第8話 好都合（後書き）

シークレットゲームとは関係ないのですが、キセルさんの『リ・ライフ』天獄と14人の自殺者達』の連載がスタートしましたね。二次創作小説ではないので、興味のある方はなろうで検索するかキセルさんのユーザーページ、もしくは自分のお気に入り小説欄から飛んでください。

個人的に好きな作品を書かれる方ですので勝手にここで宣伝させていただきます。

第9話 睨み合い

齋と九條が去ってしばらくすると、齋に気絶させられた男、赤井雄太は意識を取り戻した。

「畜生……、俺をぶん殴ったのは誰だあ!!?」

既にこの場にいない相手に対して、赤井は怒りの咆哮を上げた。

「出て来いやああああ!!!!」

手に握った鉄パイプを怒りに任せて壁に叩きつける。

そんなことをしても出て来るはずがなかったが、彼はその怒りを抑えつけることができなかった。

「こんな屈辱は初めてだぜ……。くくくつ、待ってるよ。必ず見つけ出してやつからよオ……。!」

おそらく自分を殴り倒した相手は階段を上がったのだらうと思い、彼もまた階段を上がることにした。

「ここで誰かくるまで待つてようかとも思ってたんだがよオ、ここまでなめられちゃあ借りを返さねえわけにはいかねえなあ」

どのくらい気絶していたのかはわからないが、それほど長い時間で

はないだろう。強打されたとはいえ、所詮は素手だったのだから。

「俺を殺しておかなかったこと、後悔させてやるぜえ……！」

当然の如く、階段を上った先にも誰もいない。

そんなことは彼もわかっていたのだろう、特にその場でわめくことなく、適当に3階を歩き出した。

・ ・ ・

「ん……？」

3階を歩いていたオレは、背後に人の気配を感じて振り返った。

しかし、視線の先には誰の姿もない。

「……気のせい、か？」

だが、歩き始めると、しばらくしてから再び背後に誰かの気配を感じる。

やはりつけられているな……

さて、どうしたもののか。今のところ襲ってくる様子はないようだが、後をつけられるのはいい気分ではないし、第一このままでは戦闘禁止エリアに着くまで休むこともままならない。どこかで撒くか？

だが、この広い建物の中、追手を撒くのは難しい。歩いていてはいつまでも撒くことはできない。かといって走れば音が響くので、相手に自分の居場所を教えているようなものだ。

そうになると、取れる手段としてはそれでも体力と脚力に任せて力技で逃げ切るか、それともここで撃退しておくかだな。

そしてオレは後者を選んだ。オレはそれほど足が速いわけではないので、相手が筋肉ダルマでもない限り逃げ切るのものすごく体力を使うことになる上に、確実に逃げ切れるかどうかはわからない。まあ相手がどんな奴でも敵^{かな}うっていう自信があるわけでもないが、走るよりは戦う方が得意だ。

「……おい、隠れていないで出てきたらどうだ？」

しかし、向こうからの反応はなかった。まあ当然だな。呼びかけたくらいで出てきたら苦労は……

「……ふうん、やっぱり気付いてたのね」

……出てきた。何がしたいんだ、こいつは？

身長は……、高いな、170手前くらいあるんじゃないか？ 髪は黒髪のショート。そして、顔を見る限りオレより老けている。

「ちょっと、今何か失礼なこと考えなかった!？」

「気のせいだろう。自意識過剰じゃないか？」

「……言っとくけど、私はまだ10代よ」

「そんなことはどうでもいい。それより、なぜオレの後をつけてきた？」

「どうでもいいって流された」とかいう声が聞こえた気がしたが、おそらく気のせいだろう。

「……まあ、ちょっとした様子見よ」

「そうか。それで、何かわかったか？」

「そうね、あんたがただの一般人じゃないってことがわかったわ」

なぜかドヤ顔。一体何が誇らしいのか、オレにはまったくわからない。

「ただの一般人を捕まえて失礼なことを言ってくれるな。先に言うておくが、オレは組織の関係者ではないぞ？」

「そんな言葉信じるわけないでしょ。それに、組織のことを知っている時点でほぼ確定みたいなものじゃない」

「なら、同じ言葉をお前に返そう。なぜお前は組織の存在を知っているんだ？」

「そんなの教えないわよ。私には私なりの事情があるの。それをあ

んたが知る必要はないわ」

「それを言うなら、オレにもオレの事情がある」

「どうせそれも組織絡みの事情なんですよ」

「どうやらこいつはオレを組織の関係者にしないと気が済まないようだ。」

俺から見るとお前も十分怪しいんだがな。

「そんなにオレを疑っているのなら、オレと一緒に行動したらどうだ？ もしオレがお前の言うように組織の関係者だったなら、そのうちに尻尾を出すかもしれないぞ」

そして、オレはオレでこいつを監視することができる。互いにとって悪い条件ではないだろう。

「・・・そうね、それもいいかもしれないわね。でも、やめておくわ」

だが、意外にもその返事はNOだった。

「なぜだ？ 互いに誤解を晴らすことのできるいい方法だと思うんだが」

「確かにね。でも、もしあんたが組織側の人間だった場合 まあほぼ確定だけど わざと私を好戦的なプレイヤーと接触させて、私がそいつと戦っている間に背後から攻撃してくるかもしれないじゃない。そんな危険な状況に追い込まれるのは御免だわ」

「おいおい、E P 1でSMと行動を共にしていた奴がそれを言うか？」
サブマスター

「？ 何のことよ？」

「・・・いや、なんでもない。何となくそう言わないといけないよ
うな気がしたただけだ」

「どうやらおかしな電波を受信してしまったようだ。気を付けないと
いけないな。」

「とにかく、私はあんたとは一緒に行動しないわ」

「ならどうするんだ？」

「今まで通りよ。あんたの後をつけていくわ。そうすれば敵と接触
した場合も真つ先に狙われるのはあんたになるからね」

「存在がばれておきながら尾行を継続とは・・・、馬鹿なのか？ そ
れとも頭が悪いのか？ む、どっちも同じ意味だな。それに、これ
は若干距離があるとはいえ、一緒に行動していることにはならない
のか？」

「オレの邪魔はしてくれなよ？」

「それはあんたの行動次第ね。あんたが組織と連絡を取ってたりし
たら、その時点で攻撃を仕掛けるわ。ただ、もし万が一あんたがた
だの連れてこられた側のプレイヤーだったら安心していいわよ。私
は組織の関係者しか殺さないから」

「……まあいい。そういうことなら好きにしろ」

どうせついてくるなと言ったところで無駄だろう。

さすがに攻撃しないという言葉を簡単に信じるわけにはいかないが、実際に今まで背後をとっていながら攻撃をしてこなかったのは事実だ。それに、今のこいつからは殺気がそれほど感じられない。まったくくないというわけではないが、それは相手を傷つけようという類のものではなく、どちらかという嫌悪に近いものだ。

距離が離れているのもあり、この程度なら気を付けていれば相手に後れを取ることはない範囲だ。

オレは姫宮の存在をないもののように扱って、再び戦闘禁止エリアを目指して歩き出した。

その後、結構な時間を歩いたが、姫宮は1回も手を出してこなかった。

ただ、オレが食料や武器を見つけたときには近寄ってきてその一部を分捕っていった。

休憩中にたまにいなくなる時もあった。その間に撒いてやるうかとも思ったが、それほど長い時間ではなかったのですねに見つかってしまっただろうと思っ直し、結局はおとなしく休んでおくことにした。

ちなみにどのくらい短いかというと、ちょうど1回花を摘めるくらいだ。

そんなこんなで歩き出して3時間。オレは戦闘禁止エリアの直前で1人の男と遭遇した。

そして、そいつはオレを見つけるなりこう言った。

「よう、村崎弟」

「なっ……！」

その一言は衝撃的で、オレは少しの間その場に立ち尽くしていた。

「……改めてみると、やはり彰とは似ても似つかないな。お前たち、本当に兄弟か？」

オレはそこでようやく頭が現状に追いつき、そいつに向かって問いかけた。

「お前、兄貴を知っているのか!？」

「ああ、知っているさ。なんたってこのオレが殺した奴だからな。忘れるはずがない」

「っ！ 貴様ア!！」

オレはその言葉を聞いてキレた。そいつに向かって突っ込み、ナイフをがむしゃらに振り回す。

だが、そいつは前後左右にゆらゆらと動いてそのすべてをかわした。

「危ないな。そういう物騒なものは無闇に振り回すなよ」

「このっ！」

ガッ

オレが振るったナイフはそいつが持っていたモノに弾かれた。

「そう焦るな。後でちゃんと敵討ちのチャンスはやる。今回はその誘いに来ただけだ」

そいつはそう言って、オレのナイフを弾いた警棒をこちらに向けた。

オレは投げナイフを取り出して投げつけたが、手が警棒からの電撃で痺れていたため、うまくいかなかった。

「くそっ・・・！」

「今のお前じゃ無理だ。だから、俺を倒したければもっと強い武器を集めて来い」

そいつはオレに背中を向けて歩き出した。

「4階の戦闘禁止エリアで待っている。くれぐれも他の連中に殺されてくれるなよ？俺と戦う前に死なれちゃあ拍子抜けだからな」

その言葉を最後に、そいつはその場から姿を消した。

「・・・おい、聞いていたんだろっ?」

オレはしばらく思索した後、跡をつけてきている奴に話しかけた。

「ええ、もちろん」

直に返答があり、すぐその角からそいつは姿を見せた。

「あいつは組織の関係者か?」

「そうよ。あいつは榊原悠斗。私も知っている組織のメンバーの人よ」

「なら、お前の殺害対象だな?」

「そうなるわね」

「それなら」

オレは振り向いて、そいつに向かい合った。

「オレと手を組まないか?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9208x/>

シークレットゲーム ~ subversive elements ~

2011年11月7日10時06分発行